

泡坂妻夫

乱れかくり



創元推理文庫

検印
廃止

著者紹介 1933年東京神田に生まれる。創作奇術の業績で1968年に石田天海賞受賞。1976年「DL 2号機事件」で幻影城新人賞佳作入選。1978年本作品で日本推理作家協会賞長篇賞、1988年「折鶴」で泉鏡花賞、1990年「蔭桔梗」で直木賞を受賞している。

乱れからくり

1993年9月24日 初版

著者 ^{あわ}泡 ^{さか}坂 ^{つま}妻 ^お夫

発行所 (株)東京創元社

代表者 平松一郎

(162) 東京都新宿区新小川町 1-5

電話 03・3268・8231-営業部

03・3268・8204-編集部

振替 東京 6-1565

工友会印刷・本間製本

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

©泡坂妻夫 1977 Printed in Japan

ISBN4-488-40212-7 C0193

乱れからくり

泡坂妻夫

DANCING GIMMICKS

by

Tsumao Awasaka

1977

乱れからくり

泡坂妻夫

玩具会社部長馬割朋浩から妻、真棹の素行調査を依頼された興信所所長宇内舞子は、新米社員の勝敏夫と夫妻の乗った車を尾行する。ところが、その車を隕石が直撃するという奇禍で、朋浩は死亡してしまう。この事件が幕開けを告げるかのように、不可解な死が馬割家の人々を襲う。幕末期まで遡る一族の謎と、ねじ屋敷と呼ばれる同家の庭に作られた五角形迷路に隠された秘密とは何か？ からくり尽しの中で、伝法肌の舞子と好青年敏夫の活躍が始まる……。絢爛巧緻な犯罪絵巻であり、本格推理の醍醐味に満ちた、日本推理作家協会賞受賞の傑作長編！

登場人物

- 宇内舞子……………宇内經濟研究会の社長
勝敏夫……………宇内經濟研究会の新入社員
馬割作藏……………幕末の人。玩具商「鶴寿堂」の創立者
馬割蓬堂……………作藏の子。「ねじ屋敷」を建設した
馬割鉄馬……………蓬堂の孫。ひまわり工芸の社長
馬割龍吉……………鉄馬の弟。二十年前に死亡
馬割朋浩……………龍吉の子。ひまわり工芸の製作部長
馬割真棹……………朋浩の妻
馬割透一……………真棹の子。二歳半
馬割宗児……………鉄馬の子。ひまわり工芸の営業部長
馬割香尾里……………画業に志している宗児の妹
京堂刑事……………榎木町警察署の交通課刑事
奈良木警部……………西原警察署の捜査主任
狐沢刑事……………県警本部捜査第一課の刑事

目次

1	かたかた鳥
2	スペースレース
3	はずみ車
4	ドーナッツ時計
5	八幡起上り
6	ビスクドール
7	熊んべ
8	万華鏡
9	逆立人形
10	米喰い鼠
11	斬れずの馬
12	からくり迷路

13 ねじ屋敷

二七

14 眠り人形

二六

15 ずんぶりこ

二七

16 魔童女

三三

17 からくり身上

三九

18 笑い布袋

三四

解説

中井英夫
三八

乱れからくり

1 かたかた鳥

釣銭を受け取るとき、一枚の小銭が道の上に落ちてしまった。小銭は小さく鋭い音を立てた。
勝敏夫は転がってゆく小銭をすばやく足で倒して拾いあげた。フットワークはまだ鈍っていない。
煙草の箱を手にしてから、西木ビルを尋ねた。西木ビルはすぐに判った。そのビルの前なら、何度も通っていたのである。

敏夫は煙草をポケットに入れかけたが、思いなおして、反対側のポケットに入れた。右側のポケットは、もう二つの煙草でふくらんでいたからだ。

小さな会社が立て込んでいる狭い道。印刷機の唸り声^{うなり}が聞える建物と、山小舎風の喫茶店との間に、西木ビルがあった。

茶色のモルタルが煤^{すす}けている。細長いビルで、ビルといっても木造の四階建てだった。敏夫が見上げると、曇った窓の縁に、長い雨のしみが下がっていた。

一階のガラス戸には、禿^はげた金色の文字で、パン写真新聞社と書かれている。いままではこ

の文字に氣を取られ、何度も通り過していたのだ。

その隣に開け放されたドアがあり、狭い通路を通つて、二階に登る階段が見えた。ドアの上には黒い木の札が何枚も並べられ、びっしりといろいろな会社の名が、白いエナメルで書き込まれていた。社名は二十近くもあった。

——正満工業所、研信社、劇画えぼく同人、東洋貿易新報社、工業文献調査会、東京ユニオン観光社、日本ムラアヂ株式会社、三友商事、吉野耐火ボード製造株式会社、鯨文社……その中に宇内経済研究会の社名があった。二階の列の、最後の札である。

敏夫はビルに入り、薄暗い通路を通つて階段を登ろうとした。そのとき、上から人が降りて来たので、身体を横にしなければならなかった。階段は人がやると通れる広さしかなかった。男は敏夫にちよつと目をやっただけで、外に出て行つた。糊氣のりけの抜けたベレー帽をかぶり、黒いよれよれのコートを寒そうに着た若い男だった。

敏夫は急な階段を登つた。敏夫の足もとで、階段はきしみを立てた。

二階には二つの部屋があつた。建物の後ろ側に当る部屋のガラス戸には、研信社と書かれてある。敏夫はその前を曲り、道に面した部屋の前に立つた。同じガラス戸だったが、この方には社名がなかった。敏夫はその戸を引いた。

四角い部屋で、十あまりの机が並んでいたが、普通の事務所の感じとはまるで違つていた。第一、机の形が全部不揃いふぞろだったし、書類なども見当らなかった。机の上に置いてあるのは、せいぜい灰皿ぐらゐだ。その中で、四、五人が書き物をしたり、新聞を読んだりしていた。

窓際にいる新聞を読んでいる男が、ふと顔をあげて敏夫を見た。度の強い眼鏡を掛けた、丸顔の唇の厚い男だった。敏夫が何か言おうとしたが、その男はすぐ新聞に目を戻してしまった。
「河北潟^{かほくがた}の埋立て工事、住民との対立悪化」という見出しが見えた。

ドアのすぐ前に、二つの電話機が置いてある机があり、若い男が電話を掛けている最中であつた。その机の上に、受付と書かれた札があるのを見て、敏夫は電話の終るのを待った。

若い男は、しきりに用件を書き取っていた。詰襟の学生服を着て、童顔の残っている顔だが、電話の応対は、てきぱきとしていた。

受話器を置くと、若い男は敏夫の方を向いた。

「あの、宇内経済研究会——」

言い終らぬうち、

「おう、こつちだ」

奥の方で声がした。女性の声である。

新聞を読んでいる男の前の机で、さっきから書き物をしていた人だった。敏夫は声の主と、受付の男の顔を見比べた。

「どうぞ」

そう言うと、受付の男は、自分の仕事に掛かってしまった。

「こつちい、来なさい」

女性がまた、言った。肥^ふって、目鼻だちの大きい、明るい感じのする人だ。

「おかけよ」

女性は隣の机から椅子を引き出した。敏夫は彼女の方を向いて腰を下ろした。

「私が宇内経済研究会の、宇内舞子^{まいこ}」

と、女性は書類を閉じながら言った。

「週刊誌の求人広告を見て——」

他の男たちが、敏夫をちらりと見たような気がした。

「待ってたんだ。で、履歴書は？」

敏夫は内ポケットから封筒を取り出して舞子に渡した。舞子は中を抜き出し、ざっと目を通した。白く丸い指に、赤い石が光っていた。

「——勝君、てんだね」

「そうです」

敏夫は舞子を見た。眸^{ひとみ}が大きく、人形のような顔立ちだが、年はすでに三十を越えているだろう。黒く艶^{つや}のある、量の多い髪を、無造作に後ろで束ねている。

「学生運動かい？」

その質問の意味がつかみかねて、敏夫は黙っていた。舞子は敏夫の顔を見て、また履歴書に目を移した。

「やあ、ごめんよ。学校を中退したとあったものだからね」

敏夫は周囲の視線が、また気になった。

「で、ジムの方は？」

「すっかり辞めました」

舞子はいきなり立ち上つて、椅子の背に掛けてあつた、派手なオレンジ色のコートを着た。履歴書と、大きなバッグをつかむと、

「ついて、おいで」

どンドン歩き出す。

敏夫は舞子の後を追つた。舞子は事務所を出て、階段を降りた。西木ビルを出ると、後も見ずに隣の喫茶店に入った。

無造作に一と隅を陣取り、敏夫が腰を下ろすのを待ちかねて、

「珈琲で、いいね」

有無を言わさない。

大声で珈琲の注文をすると、改めて敏夫の身体を眺め渡した。

午前中のせい、客は舞子と二人きりだった。壁に山を一杯に描いた絵が掛けられている。木目を磨き出したテーブルの上には、小さなランプが載っている。

「フライ級かい？」

と、舞子が訊いた。敏夫は苦笑いして、そうですと答えた。

「なぜ、辞めた？」

「二十三になつて、プロ入りが出来なかったからです」

「なぜ、二十三でなけりやならない？」

「二十三是大学卒でしょう。二十三でプロになる。でなければ辞す。ボクサーを志したとき、そう心に決めていたんです」

この人には自分の心が判らないだろう、と敏夫は思った。自分は最初の決意を曲げたくなかったのだ。だが、それは舞子に判らなくとも、よいことだった。

舞子はバッグから煙草の箱を取り出したが、空だった。舞子は空箱を丸めて、灰皿に突っ込んだ。

「よかったら——僕があります」

敏夫はポケットから、買ったばかりの煙草を取り出した。

「そりや有難い」

舞子は敏夫のポケットが、まだふくらんでいるのを見逃さなかった。

「勝君は、いつもそんなに煙草を持ち歩いているのかい？」

敏夫はもう一つの封を開けて、

「西木ビルが、なかなか見付からなかったのです」

「ばかだなあ」

舞子は笑った。

「道なんざ、ただで聞くものさ。これからは、そんなことじゃ、いくつ煙草を買っても間に合わないぜ」

「そうします」

舞子は運ばれて来た珈琲に口を付けた。それから勢よくマツチで煙草に火を付けた。

「弱かったろう」

「え？」

「その調子じゃあ、腕は強かったかも知れないが、勝負にや弱かったろう」

敏夫は言い当てられて、どきりとした。

最後の試合を思い出した。東日本新人王戦の決勝戦だった。最終ラウンド、十中八九まで敏夫に分のある勝負だった。自分は対手あいてをノックアウトしてプロ入りに定めてあった。対手が倒れないと知ったとき、敏夫はリングの上で棒立ちになった。対手はすかさず強烈なパンチを放った。敏夫はゴングの音を聞きながら、ひっくり返った。リングを去るとき、不思議なことに、笑いがこみ上げていた。ノックアウトされたことで、敏夫は最初の決意のとおり、ボクサーを辞めることが出来た。

「だが、氣に入った」

舞子は大きい目を、半眼にして言った。

「で、どうだい、そっちは」

「そっち？」

「私は君が氣に入ったが、君はどう思うと訊いているんだよ。私のところで、働いてみる氣はあるのかい」

予想していたより、小さな会社のようなだった。だが贅沢は言っていられない立場だ。家賃も滞っている。郷里からの学費もこれ以上ねだる気にもなれない。一方、言葉は乱暴だが、舞子という女性の人間味に、なにか牽き付けられるところがあった。

「働かせてください」

と、敏夫は姿勢を正して言った。

「どんな仕事か、まだ訊いていないぜ」

敏夫の早計さを非難する口振りだ。

「経済研究会——というと、経済を研究する会社ですか？」

「研究は研究だが、早い話が経済方面の、興信所ってやつだ」

「興信所？」

「君はなんにも知らないんだなあ」

また自分を見透された。そのとおり、今までの敏夫はボクシング以外、なんにも知らないのだ。例えば或る会社で、取引相手の営業状態、利益、信用度などを知る必要があるとき、それを調査してやるのが私の仕事だ。早い話が経済の探偵と言えば、判り易いだろう」

「僕にも出来るでしょうか」

「私が教えたとおりにやれば、誰にでも出来る。ただ、綺麗な仕事ではない。楽な仕事でもないぜ」

「身体には、自信があります」